

---

# 神様の落とし物

二神 切火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の落とし物

### 【Nコード】

N 6 2 4 3 W

### 【作者名】

二神 切火

### 【あらすじ】

人には七つの罪があるという。

『傲慢』 『嫉妬』 『憤怒』 『怠惰』 『強欲』 『暴食』 『色欲』

その罪をつかさどる七体の神と、その神を束ねる天の神。

いずれかの神を召喚し、使役する一族。天神家。その一族の二つの分家、

神を身の《外》に宿す、外神家。

神を身の《内》に宿す、内神家。

それらを絡めて弄ぶ謎の組織。

すべてが交差するとき、人と神は再び繋がらう。

## プロローグ（前書き）

気ままに書いてみました。

気に入ってもらえたら幸いです

## プロローグ

【神様】っっていると思う？

俺は、そう聞かれたら確実にこう答えていた。

「いるかもしれないし、いないかもしれない」

だが、今はちがう。同じ質問をされたら今の俺は迷わずに、固定的な肯定の意をしめすだろう。

…例えば、だ。まあ、別に例えじゃないが、例えとしよう。

ある日突然、女の子が現れ、そいつが超が付くほどのわがままで、自分が落とした宝物を探せと命令してきて…

そしてそいつは【神様】で…

そんな例え話が例えじゃない話に変わったら？

…泣けてくるだろ？

これはそう、そういう物語。

後に歴史に大きく刻まれる『七つの災厄』のうちの一つ目の『災厄』

の  
物語  
。

## 第一厄 その出会いがまさしく災厄です1（前書き）

すいません。もともとこの第一厄、投稿済みだったんですが、何かの手違いで削除してしまったみたいです。

慌てて書き直したので文脈におかしなところがあったら教えてください。

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です1

ドカツ…!!

勢いよくベッドから落ちた。

おかげでいつもより痛烈な朝だ。

いつもは落ちないはずのベッドから落ちた理由は知ってる。

「…おい。起きろ。姫歌<sup>ひめが</sup>」

俺のベッドで寝ている妹の姫歌をたたき起こす。

おそらくはまた、夜中にトイレへ行った後、寝ぼけて俺の部屋に來たんだろぅが…そのたびに俺はこいつに蹴られてベッドから落ちて  
いる。

一体これで何回目だ？

「うう…ん、ふぁ…」

俺の怒声に気づいて目を覚ましたであろう妹と寝返り様に目があった。全く…いい年してなんて様だ。Yシャツ一枚で寝てるとは…。

いくら春になって、少しは温かくなったからって、風邪を引きにくいという時期ではないんだぞ。

「おはよう…お兄ちゃん」



「とつと起きて自分の部屋へ行け」

「そ・の・ま・え・に」…　んっ！」

そう言いつつ、目をつむり顎を突き出しながら、何かを求めている。

『何か』は言うまでもないが…正直言つてうざい。

そう思った俺は手刀で姫歌の頭を割る。

ズガッ！！

鈍いような、それでいてインパクトが決まったような音が鳴り響く。

「ふえ〜ん…痛いよ〜」

「兄妹でそれは出来ないって何度言わせんだ！」

「兄妹って言っても血繋がってないもん！歳も一緒だし！誕生日だつて…」

そう、この妹、もとい義妹はちょっとした訳で家族になった幼なじみだ。

だが、こいつは昔から容姿があまり変わらない。

顔立ちはまあ、正直言ってかわいい。青くストレートな長い髪に青白く輝く瞳が姫歌の最大の特徴だ。だが、体があまりにも華奢過ぎる。それに顔がかわいいていても体がそれに追いついてない分、ロリっ子に見えてしょうがない。

何年もこんな感じなんだから妹としてしか認識出来ない。

「…それについては親父達と決着がついたろ？海外に転勤した途端、その話題はやめてくれ」

「うう…。だつて」

「だつて、じゃない」

ズビシッ！！

再び手刀。

今度のは明らかにインパクトだ。

…結構、軽くやったつもりだったんだが…デコピン感覚で…

これはマズイ…よな…

「うう…」

そう呟いた妹の瞳は潤んでいる。少量だがその涙が頬を伝っているのがわかる。

「…悪い。やり過ぎた」

いやまで。やり過ぎた所の話ではない。妹もとい義妹だからといっ

て女の子を泣かせちゃった。男として最低だ。

「あら。泣かしちゃったようね。椎名君」

刹那、唐突にかけられる声。ふと部屋の扉の前目をやるとそこには姫歌の双子の姉であり、俺の姉でもある美歌がたっていた。

「ちょっと話、聞かせてもらえるかしら？」

「…はい」

そう答えるしかない。このねえさん…言動は穏やかだが、顔が笑ってない。

…そりゃそうか。自分の妹を泣かされたら怒らない姉はいないだろうな。

ていつか朝っぱらからめんどくさい事に巻き込まれてないか…俺…。

## 第一厄 その出会いがまさしく災厄です2（前書き）

第一厄： 第一話って事です。なのにそこに1とか2とかつけてす  
いません。

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です2

さて、俺は現在、ねえさんからお叱りを受けているわけだが、全く妹が妹なら姉も姉か…。

この人も好きだねえ、Yシャツ。

なんだ？そんな恰好だと寝やすいのか？かさばるだろ！逆に…

「ちょっと……聞いているの？椎名君！」

「逆に寝にくいわ！」

「……」

「……えっ！？」

無言になるねえさんと呆氣にとられる俺。そんな気まずい空気が流れる。

…が、一人のウザったらしい女の前ではそんな空気はこれっぽっちも気にならないらしい。

「まあまあ、お姉ちゃんに椎名も。そうカリカリしないでよ」

そう、姫歌にとってそんな空気は無意味だ。しかしこいつ…さっきは『お兄ちゃん』とか言ってたくせに今度は普通に『椎名』ときたもんだ。

「でも、でもね！？姫歌ちゃん…」

「はいはい、私はもう大丈夫だから。そもそも嘘泣きだし」

「…えっ？」

ハモる俺とねえさん。たった一文字でも『ハモる』って領域に入れているのかは謎だが、見事なまでに『ハモった』。

「だって、あんな弱めのデコピン感覚の手刀じゃ赤ちゃんだって泣かないよ、たぶん」

なるほど。あれで嘘泣きとは芸達者だ。芸能事務所の人がみたら思わずスカウトするだろう。なんせ長年の付き合いの俺もそうだが実姉まで惑わせたんだからな。

だがそれでも『思わず』だ。歳相応に体が追いついていたら『思わず』は『迷わず』に変わっていただろう。スカウトが来てもせいぜい子役だ。

パンツ…！！

そんな事を考えていたらねえさんがいきなり両手を勢いよく合わせて軽快な音を鳴らした。

「…なら、手打ちにしましょう。ごめんなさい、椎名君」

ねえさんらしい。元凶たる根源が発覚したらすべてを帳消しにしてくれる。

『底無しの抱擁』とはよく言われたものだ。

ていうか、なんでこの人、謝ってんだ？

事の『根源』は確かに姫歌かも知れないが、『元凶』は俺だろう。

「何謝ってんだよ、ねえさん。謝るのはむしろ俺の方だって」

「…じゃあ、さっきも言ったように何かで手打ちにしましょう。…そうね…今日の食事は椎名君だったわよね？だったら朝食は私が作るわ。あくまで朝食は、だけどね」

なるほど。それは確かに助かる。しかし、それではねえさんだけが損をして俺だけが得をした感じた。

「なら俺は何をしようか…」

そう相手に聞こえないようにつぶやいて、何かいい案を考えようとした。

…のだが、どうやら聞こえたらしい。

「じゃあ椎名君は私を『ねえさん』じゃなくて『美歌』って読んでもらえるかしら？父さん達もしばらくは海外だし…ね？昔みたいに

今だけは『幼なじみ』に戻ろうよ」

幼なじみ、か…。そうだな。少なくとも『そこ』で踏み止まるべきなんだ。もう『あの頃』みたいには……。

「いかねえよな〜！！いいぜ！美歌！！って事で朝メシよろしくな」

そう今までの空気をぶち壊す勢いで叫ぶようにねえさん　美歌の言葉に肯定の意を示す。

「…うん」

そう呟いて微笑む。たぶん俺が何を考えていたのか美歌もわかってるんだろう。もう『あの頃』には戻れないと。この道を選んだのは俺達二人の合意の上だと。

「じゃあ、私も椎名って呼ば」

それまで全く存在を忘れていた姫歌が口を開いた。

「いや、お前既に呼び捨ててたから！！」

「ありゃ？そだっけ？」

「ふふ…。それじゃあ私は朝食の支度をしましょうか」

そう言ってイスから腰を持ち上げた。



だが俺はその行為を留める。

「ちょっと待ちなよ、美歌さん」

「誰が美歌さんですか」

「いやスマン。いきなりねえさんから美歌に替えるのは正直違和感がある。さっきは勢いに任せて美歌って読んだが、ありやたまたまだ。なんせそう呼ぶのは2年ぶりなんだ。善処してくれ」

「わかったわ。でも今日中には直してね」

「うむ。それで呼び止めたのはだな…姫歌にも関係があるんだが」

「何？」

「何かしら？」

二人がそれぞれの形で疑問符を浮かべる。

「ああ…。さっきから気になってたんだが、

ここは幼なじみとして言わせてもらおう」

「うん」

「どうぞ」

二人が頷く。

そんな二人に俺は言ってる。

「この時期にYシャツで寝るのは良くないって」

場は沈黙。

あれ、俺、何かおかしいこと言ったか？

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です3

カチャ…カチャ……

箸とお茶碗がぶつかる音だけが鳴り響く。

美歌が作った朝食を3人で囲み、会話もなく、箸を口へと運び続ける。

普段ならテレビのニュースをつけて

「へえ」。なるほど、最近の流行りは○○か」

とか

「世間じゃ何かと物騒ね」

などの当たり障りのない会話が繰り返されているのだが、

そこはほら、さっき俺がYシャツの事を口走ったから？こんな空気が流れているらしい。

いや、俺は正論を述べたつもりだったんだが…

「そういえば、今日から学園か。早く支度しないとヤバくね？」

どうにか沈黙を破ろうとそうばやいてみる。そのセリフのなかには少なくとも『何この空気！？さっさと学校行きたいぜ』という気持

ちが含まれている。

だが、そのはかなくも虚しい願いは頑として叶う様子はない。なぜなら…

「何言ってるの。今日は10時登校よ?」

だそうだ。

「え?なんで10時?」

「もう!昨日の夜も言っただじゃん!!今日は…」

どうやら今日は在校生の始業式が終わったならそのまま入学式に入るらしい。入学式は13時から。俺達、新3年生は始業式終了後、学園内に装飾の飾り付けという作業があるとのこと。なんともまあ、雑用な使用だ。それでも俺達(3年)はまだマシな方だと言える。2年なんて、3年と同じ作業に加えて、校内清掃、新入生誘導、新入生歓迎の劇の運営などがあるらしい。まあ他にも色々あるらしいがハッキリ言っただけ知りたくもない。ていうか…

「最後のはいらなくない?」

「そんなこと私に言わないでよ。これも『新入生は何かと緊張してるから劇でちょっとでも…』っていう生徒会のはからいなんだから」

そう言う姫歌はどこか不機嫌そうだ。そりゃ当然といえば当然といえる。風紀委員の姫歌にとって新年度初日にそんな祭まがいなものを催されては迷惑以外の何物ではない。

「でも大丈夫じゃない？だってあくまで初日よ？」

今までしゃべらずに朝食を食べていた美歌が口を開いた。どうやら完食したようで一人、お茶を啜っていた。

「でも毎年一人はいるのよね。狂気的な問題を起こす人。姫歌ちゃんもたいへんよね」

「いや、もしそうなくても大丈夫。椎名達に助けてもらおうからね？」

そう言いつつ、何か期待の眼差しでこっちを見てくる。だが俺はそんな期待に答えることは出来ない。

「すまないな。今日は『召集』をかけていない。俺はともかく『俺達』では助けられないぞ」

「ええ？でも何かあったらみんな察して駆け付けるんじゃないの？」

「ああ。いつもならそうだが、みんな『出張中』だ。今、学園にいるのは俺と結城くらいだ。せめて残ってるのが結城じゃなくてミーナならたとえ『出張中』でも『召集』出来たんだが…」

「ふーん…。意外と役にたたないんだね。結城君も」

姫歌よ…。それを本人の前で言うんじゃないぞ。あいつはあれで結構デリケートなんだ。

「大丈夫よ。そんな事が起こったら私たちのところから何人が派遣するから。これぐらいで三調律は乱れないわよ」  
チューニング・トライアングル

…美歌の言う三調律とは学園内に置ける三つの勢力を表している。

一つ目は姫歌が委員長を務める風紀委員。活動内容の基本は一般の学校とさして変わらない。風紀を乱す者への制裁。といえば聞こえは言いがその実質は『制裁に手段を選ばない』というところにある。暴力、拷問といった、まあ人間性を疑う行動を行っていた。だが、姫歌が委員長となったと同時にそのルールを少しだけ改変した。いや、『少しだけしか』改変できなかった。

そして、その『少しだけ』で姫歌が創ったのが美歌が委員長を務める懲罰委員会。これが二つ目だ。しかし『懲罰』とは名ばかりでそれは風紀委員の活動内容を崩すためのものだ。

学園内において『底無しの抱擁』と言われることからその優しさの度合いがわかる美歌が懲罰委員に移籍したのならどう転んでも『懲罰』に悪いイメージは浮かばなかった。

つまり『暴力』は風紀委員が、『拷問』は懲罰委員が引き継ぐ事によって不正者を取り締まるルールを柔らかくしたのだ。

加えてこの二つの委員会…

役割が異質過ぎるため、『三つ目』の存在をひた隠しにしている。だがそれでいいと俺は思う。なぜなら『異質』という点においては三つ目の方が明らかに、いやさらにそれを上回るくらい異質だからだ。

ひた隠しに、というよりはむしろ隠れみのかとして風紀委員と懲罰委員を目立たたせているという風にも捉えられなくもない。

… いちいち、曖昧な発言を繰り返しているのは、それが俺の客観的私感だからだ。

つまりは三つ目、『諜報委員会』は一般生徒に認知されていない。いや、『認知』はされているが『正確な活動倫理』が知れ渡っていない。俗に言われる社会の表裏で表すなら諜報委員会は明らかに裏だ。だが、設立構造がかなり複雑なため、表としての顔も持っている。それが『派遣委員会』だ。

というよりも『派遣』しつつ、『諜報』するという方が正しいのかもな。

… 一般生徒に「便利屋」やら「雑務屋」とかと呼ばれているのは別として。

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です4

「準備出来たか？」

「ええ、大丈夫よ」

「姫歌は？」

「姫歌ならもうすぐ来るんじゃないかしら？ …ほら」

「ごめん。遅くなっちゃって」

「いや、いいさ。それじゃ行きますか」

玄関には俺と美歌。そして今しがた2階から降りてきた姫歌がいる。さっきまで髪を下ろして見分けがつかなかった二人だが（俺には見分けがつかないわけがないが、端からみたら、という話だ。無論、姫歌と美歌ではスタイルがちがいすぎているから二人をよく知る奴がみたら一瞬で誰が誰だかわかるだろう）、姫歌はツインテールに、美歌はポニーテールにしている。こうしてみれば、二人とも違った雰囲気のでていて、健全な男子なら見とれている事だろう。

玄関のドアに鍵を掛け、学園に向かって足を踏み出した。時間にして8時30分。10時に登校という前付けを明らかに無視していた。学園までは30分ほど歩けば容易にたどり着く。だからこの時間に家をでるのは少し早いと思う。



しかしそうした理由は美歌が朝食を食べ終わった後に口走った言葉が原因だった。

「さて、そろそろ準備しなきゃ」

「あれ？もういくのか？」

「いくら何でも早くない？ 今日懲罰委員ってなにかあった？」

お互いの思う所を姫歌と共に問いかける。そして美歌はうしろめいたような表情で、

「ええ…。昨年度にやり残した書類の整理をしなきゃならないの」

「「うつ…」」

それを聞いた瞬間、俺たち二人の声はどもった。

「風紀と諜報はそれぞれもう昨年度の分は片付けたんでしょうけど、懲罰はそうもいなくて…」

なにせ人手が…と続けた美歌だがそんな事はどうでもいい。そしてそれはきつと姫歌も同じのはずだ。

「姫歌…」

「え！？ あ、はい？」

「…仕事、終わってるか？」

そして静かにあはは、と笑って首を横に振った。

「よし、学校へ行こう！」

とまあ、こんな感じで今にいたるわけだが、正直、こんな状態じゃ『三調律』なんて成り立たねえな。うん、不思議とそれだけは言える気がする。何故なら美歌は「人手が…」とぼやいていたが、俺が所属している諜報委員会に比べればマシだと言える。

現在、諜報に残された人数は俺と結城の二人。あとの4人は面の顔『派遣委員』として『出張』状態だ。

「それにしても、ここまでくると一番大変なのは諜報だよね。何てったって人手が…。まあ、頑張りなよ」

ザ・他人事。こいつはもう少し気の利いた事言えないのか？

「まあ、手があいたらあたし達も手伝いに来るから。ね？ お姉ちゃん」

「ええ、 そうね」

前言撤回。やはり姫歌は愛すべき存在だ。

「…ありがとな」

「お互い大変だしね。協力していかないと。 …特にこの時期は」

「…そうね。 やはり今回も？」

おそらく二人はさっき話した『狂気的な問題を起こす人』の事を言っているんだろう。

「その事ならさっき結城に連絡しておいた。 あいつもすでに市内のキナ臭そうな所はチェックしていたらしい。 だが、今のところは何も無いようだな」

「…へえ」。 随分、下準備がいいのね、結城君は」

「けど気は抜けないよね。 例年が例年だから…」

さっきまでの陽気な雰囲気は一気にシリアスな雰囲気へと変わっていた。

しかしそれは前方からかけられた声で一気に元の雰囲気へと戻った。

家をでて15分の地点。ちょうど学校への道のりの中間地点にあたる交差点でその声の主は待ちかまえていた。

「おはようございます。先輩方。そして何よりもお久しぶりです」

「フィアナか…。久しぶりだな」

「おおー！ フィーちゃん久しぶり」

そこにいたのは懲罰委員2年、フィアナ・

K・クロステリア。アッシュブロンドの髪に翠の瞳。どこか気品さを思わせる整った顔立ち。年下とは思えないほど大人びている。

「ちゃんはおやめ下さいと何度も申し上げたつもりなんですが…」

名前からわか…らないが、本人いわく日本人とイギリス人のハーフらしい。

「可愛いからいいじゃん」

「そうは言われなくても…」

「そっぴや、何でフィアナは待ってたんだ？ 今日とは別に待ち合わせしてないだろう？」

「はい、実は私も昨年度に残した仕事の事を気にかけておりまして。それで先ほど美歌先輩に連絡したところ、今から学園に向かうとの事でしたので、失礼ながら賛同させていただきました」

「そういうことか」

「それにしても、その話し方どうしたの？」

そう問いかけるのは美歌。確かにそれは俺も気になっていたところだ。

「はい。自分で申し上げるのは少々あつでがましいことなのですが、皆様も御存知の通り私は変わった体質の持ち主なので…」

変わった体質。フィアナは周りの影響を極端に受ける体質らしい。言語、口調、行動、仕草、はたまた思考回路まで…。たとえそれが自分の意志に反していても、だそうだ。その影響から抜け出すのに、三カ月はかかるらしい。…もしくはミーナの『術』を使うか、だな…。

「なるほど。じゃあ、イギリスに戻ってたのね？」

「はい、不本意ながら春の休暇は本国の方に…。ようやく、日本語に『戻れた』のはつい昨日の事でして…」

… いったいこいつの実家はどうなっているんだろうか？ もしやめちゃめちや金持ちの貴族様なのか？ それとも英国人とやらはみんなこんなお上品なお口調なのでしょうか？

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「い、いや。何でもないさ。それよりも姫歌、全くもって忘れていたが、早く学校行かないとヤバくないか？」

「あつ……」

そくだ。例年の事件の話や、久々にフィアナに会った事もあった、  
『昨年度の仕事の残りを片づける』という目的を忘れていた。

「や、ヤバイよ、椎名！！　こんな事してる場合じゃないよ」

「あ、ああ……。悪い、美歌。フィアナ。俺たち先行くわ」

そう言って姫歌と一緒に走り出そうとした。しかし、

「何言ってるの？　学校ならもう目と鼻の先じゃない」

「……え？」

言われてみると、直線100メートルも充たない距離に学園の門が見えた。

「……いや、この距離を悠長に歩く時間さえもつたいねえ！！　い  
くぜ姫歌！！」

「アイアイサー！」

そう言って二人で走る。

そしてその勢いのまま、校舎敷地内へ…

『ウー！ ウツー！！』

はいれなかった。

「…あれ？」

いや、はいれてはいるが、敷地に入った瞬間、対不審者用のサイレンが鳴り出した。

いや、俺ここの生徒ですけど？ 不審者じゃないですけど！？

「…まさか椎名…。個別学生認証、忘れたの？」

「…」

「あれ、どうしたの？ 二人共。ていうかこのサイレンの方がどうしたの！？」

そこにやって来たのはさっきの二人。

「いや、椎名が認可証、忘れたっぽくて」

「ええ！？ そうなのですか、椎名様！？」

「…」

「と、とりあえず取りに戻ったら？ そうすればせめて10時までには戻ってこれると思うわ。このサイレンは風紀と懲罰権限で止めて置くから」

「…なんか…もう…疲れた」

そりゃそうです。ここまで来たのにまさか認可証を忘れるとは。我ながらバカだと思います。

「…とりあえず……認可証、取りに行くわ……」

そううなだれつつ、身を翻して、来た道を再び歩き出す。

背後からはけたたましく鳴り響くサイレンと、弁解は任せといてね」と叫ぶ姫歌の声が聞こえていた。



## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です5

個別学生認可証。全体的に白く、銀色の校章がほられた手帳。俗に言われる学生証だ。だが、それを学生証と呼ぶ奴はこの学園にはいない。なぜなら、学生証は『学園の生徒である事を認める』ものである。個別学生認可証はそれ以外にも様々な役割をになっているからだ。

例えば、自動販売機。ポートの部分に個別学生認可証をかざすだけでタダで飲み物が飲める。といった具合だ。

俺達が通う学園、皇学園の生徒はいずれの公共サービスは認可証を持っているかぎり、『タダ』でサービスを受けられる。

医療機関の利用しかり。電車、バスの運賃しかり。飲食店も、コンビニも、何から何まで、だ。

持っているだけで、すべての行動が認可されている。故に生徒は『認可証』と呼ぶ。もしくはこの手帳が一個人しか使用できないことから、『個別証』と呼ぶ奴もいる。…『何でも帳』とかいう奴もいたな。

「いや、そんな落書き帳みたいになんて言わなくても…」

玄関のドアの鍵をあけつつ、俺はそうばやいた。さきの学園に入らなかったで、認可証を取りに来たわけだ。

玄関のすぐ横にある階段を一直線に駆け登り、自分の部屋にある机の上を見渡す。そこには黒塗りの、そして金色の校彰がほられた手帳があった。

「…黒の個別情報体か…」  
ブラック・アカウント

一般生徒のソレとは違う認可証を手にとってブレザーの内ポケットに入れた。

「さて、いきますか…」

これで学園のセキュリティはなんなく突破出来るはずだ。

「仕事の整理は…もうできないな」

もう、何て言うか…。笑うしかねえ。

「はは、…はあ」

そしてその後に溜息吐くしかねえ。

「…ったく。書類くらい家に持って帰らせろってんだ」

学長曰く、風紀と懲罰と諜報は機密事項を扱う委員会のため、校外での活動を禁ずるんだそうだ。ていうか…。

「学生に機密もクソもねえだろ！！いや、まあね？諜報はいろいろと秘密にすべきことあるけどさ！！派遣委員にそれはないんじゃないの？便利屋とかって呼ばれてんだよ？」

と独りで心境をばやいても、…いや、叫んでも何も始まらないな。

「…学園行こう」

玄関に鍵をかけてそう呟いた。

さっきも見た光景を再度見ながら学園へと向かう。一つ違うのは道行くひと達の中に学園の制服を来た奴らがいるくらいか…。  
ふと、腕時計をみやると既に9時半を回っていた。…まあ、中間地

点は越えたから遅刻する心配はなさそうだが、今日はどこかしら不幸が付き纏ってるみたいだから、少し急ぐかな。

そう自分に言い聞かせた、次の瞬間…。

「…！ ……！！」

（ん？）

何やら怒鳴り声のような物が、聞こえた気がした。…聞こえてきたのは空地奥の建設途中だったデパートのほうか…。

その付近の道行く生徒を見ると、明らかに『見て見ぬフリ』を決め込んでいる。

「…はあ。何でこんな朝っぱらから…。人の気持ちを考えたことあるのか」

俺は静かな怒声を呟いて、声がした方へ歩きだした。そして、そこを一望できる辺りまで来たところで、「やっぱりか…。はあ…」と、いい加減自分でも聞き飽きた溜息を吐き出した。

そこは漫画やアニメに出て来るような、『不良がカツアゲする現場』

のような場所だ。そして今、目にしているのは正にソレ…。

「だから、持っていないって言ってるじゃないですか!！」

「おいおい、嬢ちゃん。皇の制服着といて持っていないって事は無い  
だろ!? さつさと『何でも帳』とやらを出せよ!！」

「だからもっていないんです!! 私は転入生で、その学園には今日  
から登校だから『何でも帳』とかわけの分からないもの、持ってる  
わけないの!！」

絡まれてる女生徒は、若干遠目なため(ていうか俺は目が悪い)見  
えづらいが、長い黒髪をなびかせている。背は俺より少し低いくら  
いか…。

(大和撫子って奴だな)

絡んでる奴はガタイがでかく金太郎辺りがいい呼び名かもしれない。

……俺としてはその後ろで控えている細身の眼鏡野郎が気になるが  
…。

どうやらこの体格が真逆な不良共は近隣高校でも屈指の問題校『来栖学院』の連中っぽい。

（やべえ……。めんどくせえ。てかうちの学園、転校制度無いんだが……。それ以前に何であの女は喧嘩ごしなんだ？）

「フフ。…仕方ありませんね。こうなったら体に直接聞きましょうか？」

「おお！？ やっちゃいますか？ 確かにこの上玉ならボスも喜ぶっしょー！」

（……………）

俺はそれまで考えていた思考を停止。

「その兄さん達。そこまでにしといたらどう？」

静観していた俺はそれを止め、男二人にそう言い放った。

「なんだてめえ」

それに気づいたガタイのいい男は身を翻し俺にそう言いながら睨み

つけて来る。

「彼女を引き取らせてもらう。抵抗するなら容赦はしないが。」

そう言いながら、さっき内ポケットに入れた認可証を見せつける。

「はあ！？　なにそれ？　水戸黄門にでもなつたつもりか！？」

怒声をあげつつ、俺に近づこうとする大男。しかしそれを眼鏡野郎が軽く手で制す。

「……やめなさい。忘れたんですか？　彼が持っているのは『黒の認可証』。事を構えるのは些か不粹というやつです」

チツと舌打ちする大男をいなしながら眼鏡野郎は俺に向き合った。

「いやゝ。連れが失礼しました。それじゃあ私たちはこれで。いずれ『また』……」

二人去っていく後ろ姿を見ながら、

「いや、もう二度と会いたくねえけど！？　なんだよ、またって」

と叫ぶ俺に後ろから話かける女生徒が一人。

「あの…どうもありがとうございました」

（アレ？ さっきの喧嘩ごしっぷりが感じられなくなったな）

振り返って再度彼女を見ると、

「うお…」

という言葉しか出て来ない。ヤバいが…可愛すぎる。姫歌も美歌も可愛いほつだがこの女生徒は段違いだ。今時珍しい長い黒髪に漆黒の瞳。体格は美歌と同じくらいか。

「あの！聞いてますか？」

「え？ あ、はい？」

「実は私、転校の手続きをしないといけないので、これで…！お礼は後日改めて」

「ああ、そんなのいいから。ていつかうちに転校制度は…」



そこまで言って気づく。瞬きをしていただけなのに、彼女はいつのまにか俺の目の前からいなくなっていた。

「は？ 消えた？ いやいや『一般生徒』にそんなこと出来るわけ……。ま、いいか」

過ぎたことはしょうがない。人生前向きに、あるがままをみて、受け止めて、理解しなきゃな。

「いや、ていうか……」

ふと目に入った空き地に設置されている大きな時計の文字盤を見ると、既に10時5分前まで針が進んでいた。

「遅刻じゃん！！ ……ま、いいか。人生前向きに。って出来るか！  
！ 初日から遅刻ってどんなだよ」

それでも俺は学園に向かって歩を進めた。

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です6

椎名が空き地に設置されている時計をみて、驚愕してからその場を立ち去ろうとする後ろ姿を建設中だったデパートの屋上から見下ろす人影がふたつ。

「…それで？ どうすんだよ」

その中の体が大きい男がそうばやいた。

「いえいえ、どうもしませんよ。彼が黒の認証証を持っているって事は恐らく三調律に関係する人物。あんな『ただ者じゃない集団』に関わるつもりなんありませんよ」

眼鏡をかけたいかにも優男というイメージだが、纏っている空気がそうじゃないとおもわせる。どうやらこの二人は先の女生徒を脅していた不良のようだ。

「けどオメーならどうにかなったんじゃないかねえか？」

「…貴方はもうちょっと敵を見定める感覚を研ぎ澄ませたらどうですか？ いくら私が『殺人術』を学んでいたとしても、恐らく今の少年には敵わないでしょうね」

「…そなの？」

「そうですね。多分、赤嶺さんでもてこずるんじゃないですか？」

「…ボスも手こずるほどののかよ。ますます恐ろしいぜ、皇学園」

「なに…。既に『布石』は校内に潜入させました。後は『強欲』と『怠惰』の名の元に認可証を集めまくれば、計画の第一段階は終了です。そうすればいくら三調律が働きかけようが我等に敵は無いです」

なにやら不穏な事を口走る彼らは、得に眼鏡をかけた少年からはそれこそ明らかに『ただ者じゃない空気』が感じられた。

「さて。そろそろ行きますか。『神狩り』……再開ですよ。フッフ」

そして彼等は踵を歸し、屋上を去った。

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です7

体育館。そこに敷き詰められるようにおかれた椅子には皇学園の在校生がすわっている。俺も例外ではない。

「えゝ、それではゝ今年度も皇学園の生徒であるという自覚をもつて、勉学に励んで頂きたい。以上だゝ」

この間延びた声で演説をしていたのはうちの学園長、美苺<sup>みかるまなぶ</sup>学。ハワイアン的な恰好をしていて見た目どおりチャランポランな奴だ。なんと齡22歳。突っ込みたいことはいろいろあるが、まあやめておこつ。

「にしても、おめーが初日から遅刻するとわなゝ」

学園長の挨拶が終わると同時に左隣から俺に話しかける奴がいた。

「そついうおまえだつて遅刻していたじゃないか。結城」

朝から少しだけ触れていたが、こいつが結城という奴だ。本人いわく下の名前は誰も知らない。ということにしてほしいとの事だ。そついった謎の存在がかつこよさを引き出すらしい。…ていうか、学生名簿にはしっかりと結城<sup>ゆづきかすみ</sup>霞と書かれてはいるが…。

俺が学園に着いたのは、10時を少しまわった時の事だ。しかし、校門をくぐる手前、結城とでくわした。つまりはこいつも遅刻したということだ。

「いや、今日さ、普通に登校だと思って来てみたら、誰もいねえじゃん？ そしたらおまえから電話かかってきて今日の登校時間を教えてもらったわけよ」

なるほど。どうやら俺がさっきこいつに電話したとき、今日の予定を聞いてきたのはそのためらしい。

「…それで、一旦家に戻ったら遅刻したと？ 馬鹿だな」

「うつせーな。そういうテメエはどうなんだよ」

「…人助けしてたら遅刻した」

別に嘘は言っていない。しかし結城は「そんな言い訳で済んだら、警察いらないぜ」と肩を竦めていた。

そんなおり、司会のアナウンスが館内に響く。

『これにて、始業式を閉式といたします。なお、広場の方にクラス替えの紙を貼っておりますので、自分のクラスを確認後、教室でHRを受けたら各自、入学式の準備にあたってください』

聞き終わると生徒たちは一斉に席を立ち、流れるように館内を後にする。俺も例外なくその流れにのる。まるで、休日の町の人波に揉まれるようにしながら、俺と結城も館内を後にする。館内から出た生徒はみな広場の方へと向かっていた。しかし、そこへ行くための道は二つあり、裏庭を通るか、中庭を通るかで、大半の生徒の行く道は二分されている。そのため、さっきまでの人の波ってものは多少なりとも柔らんでいた。

そんな裏庭にも中庭にも向かわずに体育館の玄関横で壁にもたれるようにして俺と結城は佇んでいた。先に口を開けたのは結城の方だった。

「んで？。どうすんよ」

「どうするって何を？」

「クラス替え、見に行くのか？」

そう俺に尋ねて来る結城。本来、こんな質問自体がおかしな事と言えるだろう。クラス替えの貼紙を見に行く。普通ならそれが当たり前なんだから。しかし、三調律を担う俺達にとってその行動はあまりにも意味を成さない。だから俺は答えてやる。

「どうせ俺達は同じクラスだよ。…まあ、美歌辺りは見に行つて  
だろうから、念のため後で聞くとしよう」

「……」

しかし、何故かそこで黙る結城。

「なんだ？ やっぱり見に行くのか？」

「いや、そうじゃなくてさ。…呼び方、戻したんだな」

「え？ あ…ああ…」

いきなり脈絡のないことを言う結城に対して、俺の声は裏返つてしまふ。おそらくは『姉さん』から『美歌』に呼び方を戻した事を言っているんだろう。

「…今朝な、戻した。といっても親父が帰ってくるまでの間だけだ。まあ、つつこまないでいてくれ」

ヤレヤレと嘆息をもらし、懇願するように俺は結城を横目でみやる。すると何故か結城は微笑んでいた。

「いや、別に突っ込むつもりはないよ」

「…じゃあ、何で笑つてんだよ？」

「やっぱりお前らは、ありのままのお前らであつたほうがお前らしいと思つただけさ。しかしまあ、よくそう易々と呼び方を替えら

れたものだ。起用だね、椎名君は」

「いや、それでも結構、時間かけたんだぜ」

「どれくらいよ？」

「……5分くらい？」

「短かつ！！！」

そんな他愛もない会話を繰り返していると過ぎ行く生徒の中から声をかけてくる女生徒がいた。

「あ、いたいた。もう、どこに行ってたの？ 心配しちゃったじゃない。あ、結城君、おはよう」

噂をすればなんとやらって奴か。俺達に声をかけてきた女生徒美歌が目の前で立ち止まった。その傍らには姫歌もいる。結城は適当に「うっす」と会釈する。

「心配も何も、俺は普通に過ごしてただけなんだが……」

「右の意見を肯定」

俺の左側に立っている結城がそう告げる。

「まあまあ……。お姉ちゃん心配してたんだよ。『ああ……。椎名君



は無事登校出来たのかしら』って。おかげで式中もずっとソワソワしてたもんね？」

「ちょ、ちよと…」

急に饒舌になる姫歌。美歌も何故か顔を赤らめている。確かに俺は再登校してから美歌たちと話すのはこれが初めてだ。美歌の心配性を考えるならメールの一つでも送れば良かったのかも知れない。ここは素直に謝っておいた方がいいだろう。

「すま……」

「ていうか、見に行かないの？ クラス割り」

謝ろうとしたところでまるで割り込むかのように姫歌がそう告げた。

「うおい！！ 人が謝ろうとしてんのに割り込むなよ！」

「え？ お前こんな事で謝んの？ なんか安っぺえ〜」

「うつせえな、結城。まずはテメエから謝まらせてやるつか？」

「すみませんでした」

一瞬にして謝りだす結城に美歌も姫歌も苦笑しているようだ。

「なんか結城君の方が安っぽいね。まあいいや。で、見に行かないの？ クラス割り」

美歌は「俺は安っぽくねえよ」とわめく結城を無視して続ける。

「俺はお前らが見に行ってくれてると思ってたんだが」

「それならみんなで行きましょう。その方が何かと手っ取り早いでしょう？」

美歌の提案に対して皆が肯定し、「じゃ、行ってみよう」と姫歌が先陣をきりながら次に結城、美歌と俺の順でその場を後にする。そして、俺は右肩のすぐ横にある美歌の頭に手を置く。撫でるように髪を梳きながら、さっきの出来事を改めて蒸し返す。

「…すまなかつたな。今度からはちゃんとメールとかするからさ」  
顔を赤らめながら俺をみやる美歌。

「…別に大丈夫よ。…それより……手……」  
「手？ ああ、ゴメン！」

俺は慌てて美歌の頭から手を下ろす。

「悪いな……。ついクセで」

俺は姫歌と美歌に限り、頭を無性に撫でたくなってしまう。ミーナいわく『変態シスコン野郎』だそうだ。

「うっん。…別にいいんだけど……むしろそのままで…」

許しが得たのはいいが、最後の方がうまく聞き取れなかったな。

「ん？　なんだって？」

「な、何でもありません！」

…あつそ。まあ、本人がそう言うのならそうなんだろう。

「あ、そうそう。三人とも」

先行していた姫歌が振り返って、俺達をそれぞれ見回した。

「なによ？　姫歌っち」

結城の冗談めかした呼び方を無視して姫歌は話続ける。

「さつき学園長から教えてもらったんだけど…。どうやらうちのクラスに転校生が来るらしいんだよね」

「…はっ？」「」

唐突な姫歌の宣告に俺達三人は同時に疑問符を浮かべた。

「いやいや、この学園に転校制度は…」

そこまで言って俺は気づく。さっき助けたうちの女生徒は自分を「転校生」だと言っていた。しかも姫歌の話が確かなら学園長公認、しかもうちのクラス…。ならあの女生徒は『一般生徒にはなりえない存在』ということだ。

「…あれ？」

俺はさらなる疑問を浮かべ、耳元では「どうかしたの？」という美歌の囁きだけが聞こえていた。

## 第一巻 その出会いがまさしく災厄です8

椎名がそんなことに懸念している頃、学園長室には一人の女生徒が佇んでいた。

来客用のソファに腰を落とし、事務員にだされたコーヒーに口をつけると、まるで満足したかのように微笑みながらカップを置いた。

そんな彼女といえは黒髪に漆黒の瞳。身長はさして高くない。顔立ちは見事に整っており、まるで大和撫子のようなようだ。そう、さつき椎名が不良から助けた自称・転校生である。

もつとも、もう自称などではなく、彼女が学園長室にいるという時点でそれは公認の事となっている。

嘆息の混じった声で彼女はつぶやいた。

「...どうしてこんな事になったのかな」

どうも話の筋がわからないような言葉だが、しかし彼女の次に連ねるであろう言葉は勢いよく開かれた学園長室の扉の音で遮られた。

洗礼な装飾が施された扉から現れたのはハワイアンな服装の男。あまりにもこの場に相応しくない人物というのが、端からみた第一印象だが、彼ほどこの場に相応しい人物はいない。

「遅かったじゃないですか…。学園長」

「いやゝごめんごめん。新年度ともなると何かと忙しくてさ」

「…あんな適当な挨拶で、よくそんな事が言えますね」

「……見てたの？」

「いえ、見てないです。けどその反応からして、どうやら適当な挨拶だったみたいですな」

してやられたように学園長である美莉 学は肩をすくめ、まるで呆れたようにつぶやいた。

「全く…。君ほど人を食った性格の奴は久しぶりにみたよ」

「ありがとうございます」

「いや、褒めてないからね!？」

ため息を漏らしながら女生徒の向かいの椅子に腰掛ける学。

「じゃあ、これ。渡しとくから」

そういつて彼が取り出したのは黒の認可証。それを開いて女生徒に

渡す。写真を貼りつける部分にはすでに彼女の顔写真があった。

「黒の認証ですか…」

「ああ。一般の人はそう呼ぶけどね。正式には黒の個別情報体<sup>ブラック・アカウント</sup>って言うんだよ」

「…中二ですか？」

それを聞いた学はやるせなさそうに含み笑いを浮かべていた。

「いや、それを言われるとイタいんだよね。何せ、考えたのは僕じゃなくて今から君のクラスメイトになる奴何だけど」

学は前屈みになっていた体を一気に背もたれへと預けた。

「しかし、どうしてまた、この学園に？ 『君という存在』がなぜ人一人にこだわる？」

「…それはまた後で話します」

そう言っただけで彼女は立ち上がり、学の後ろにある窓に歩み寄った。そこから見渡せる広場は生徒たちで行き交っていた。行き交う先は広場の中央。クラス分けの紙が貼られた所だ。

「天神の三人に会ってからでも遅くはないと思います。…積もる話

もありますし」

彼女はひたすらに生徒たちの波を見てそう言った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6243w/>

---

神様の落とし物

2011年11月20日11時26分発行